

菅野敦志著

## 台湾の言語と文字

——「国語・方言・文字改革」

《勤草書房、二〇二二年二月、三五六頁》

最初の海外旅行は一九六八年の台湾。中国語の集中学習を目的に、夏休みの一カ月半ほどを淡水の淡江文理学院で過ごしたことがある。

先ず教えられたのは注音字母だった。日本で学んだローマ字ピンインでの発音学習を希望すると、「あれでは正しい発音は学べません」と先生は拒否。そこで嫌々ながらも注音字母を覚えざるをえない。次いで教科書。当然のように繁体字で書かれている。簡体字の教科書はありませんかと申し出ると、「簡体字は漢字ではない。中国文化とは相容れない」と、これまた二ペもなく拒否される。街で目にした電柱や商店の店先に貼られた手書き広告には、簡体字で書かれたものが少なくなかったというのに。

三省堂の『国語辞典』を手に校内を歩いていると、顔見知りになった掃除のおばさんが「日本にも国語はあるのか」と驚きの声を挙げた。仕事仲間とは時に日本語の単語を交えながら台湾語で話しているが、語学研修中の日本人学生には「国語」で対応してくれる。もつとも彼女は自分は本省人で、話すのは「国語」ではなく北京語だと言いつづけていたが。

——この本を読み進んでいると、遠い昔の台湾でのささやかな経験が浮かぶと同時に、当時抱いた素朴な疑問が氷解するようないがした。

国共内戦に破れた蒋介石政権が再興を目指し、台湾を「大陸」への反攻基地に作り変えようとする一方、その過程で生まれた省籍対立という深い亀裂に台湾社会は悩まされ続けた。

蒋介石政権による台湾の中華民国化の功罪に就いては政治・経済・社会など多くの視点から様々に論じられてきたが、これまで文化——ことに、その中核である言語・文字の面からの考察

が欠落しがちであった。その欠落した部分を、著者である菅野氏は膨大な資料を発掘し、縦横に駆使して解き明かそうとする。

「光復」は台湾の人びとに「脱日本化」を逼る。それまで慣れ親しんだ日本語は禁止された。台湾省国語推行委員会が成立する一方で、「方言の復活」という動きは潰える。方言である台湾語を媒介とする国語教育の魁ともいえる「台湾に消えたもう一つの『国語』運動」。五四運動精神に基づく「台湾における『簡体字論争』」。マスメディアにおける方言番組制限への動き。注音字母による台湾語表記運動。やがて起こった言語問題の政治問題化。政治・経済・社会面での本省人の影響力拡大に伴う方言（台湾語、客家語、少数民族語）の復権——単一言語主義から郷土言語教育への動きなど。

中華民国化、本土化、新たななる中国化——台湾を知る新たな視点を与えてくれる一冊だ。（樋泉克夫）